

## 罪と罰

フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー

二〇二三年九月三〇日

七月の初め、異常に暑いさかりの夕方近く、ひとりの青年が、〆横町にまた借りしている小さな部屋から通りに出ると、何か心に決めかねているという様子で、ゆつくりと〆橋のほうに歩きだした。

階段口で彼は、下宿のおかみと無事顔を合わさずにすんだ。彼が借りている小部屋は、五階建ての高い建物の屋根の真下にあつて、部屋というよりもどこか戸棚を思わせるところがあつた。食事と女中つきで彼に部屋を貸している当のおかみは、一階下の独立した部屋に住んでいたもので、外出のたびに彼は、階段に向かつてほとんどいつも開け放たれている台所の脇を、いやでも通らなくてはならなかつた。そしてそこを通るごとに、何か病的ともいえる気後れにかられ、そのことを自分でも恥ずかしく感じて、そのためにまた顔をしかめるのだった。下宿代がたまりにたまっていたので、おかみと顔を合わせるのが怖かつたのである。

かつて彼は、こんな風にも臆病でいじけた青年ではなかつた。いやむしろ、それと正反対なぐらいだった。ところがいつの時点からか、心気症にも似た、いらだちやすい、張り詰めた状態に陥っていた。あまりに深く自分の殻に閉じこもり、世間の人たちからも孤立してしまつたため、下宿のおかみどころか、相手がだれであれ、人と顔を合わせるのが怖くなつた。貧乏にも押しひしがれていた。ところが、近ごろは、そんなせっぱまつた暮らしにも苦しさを感じなくなつていた。毎日の差し迫つた仕事を丸ごと放り出し、それにとりかかる気にもなれなかつた。だから、じつところ、自分にどんな魂胆を抱いていようと、下宿のおかみ風情などへとも思つていなかったのだ。ただし、階段口で呼び止められ、自分にはなんの関わりもないばかりか世間話やら、いつものしつこい下宿代の催促やら、脅しやら、泣き言やらを聞かされると、こちらもうまく返答をかわしたり、わびのひとつも入れたり、嘘をついたりしなければならぬ——いや、そんなことなら、いっそ子猫みたいに、忍び足で階段をすり抜け、だれにも見られないようにこっそり逃げだすほうがはるかにまじだつた。

しかし今日ばかりは、表に出るなり、債権者のおかみと顔を合わせるのをここまで怖れていたかと、われながらあきれかへつた。

《あんな大それたことを決行しようとしているのに、こんな愚にもつかぬことにびくついたりして！》奇妙な含

み笑いを浮かべながら、彼は思った。《なるほど……そういうことか……人間ってのはすべてを手中に収めながら、それをみすみす逃してしまふ、それももっぱら臆病のせいだ……こいつはもう公理といつてもいいぞ……おもしろいのは、人間がいの一番に怖れるものって何かってことだ。新しい一歩、自分の新しい言葉、人間は何よりもそれを恐れているんだ……それにしても、おしゃべりがすぎるな。何もせずにいるのは、このおしゃべりのせいだ。いや、逆にこういうことかもしれない。おしゃべりがすぎるのは、なにもしていないからだ。一日中、下宿に寝転がって……そう、ゴロフ王のことなんか考えながら、こうしてしゃべることを覚えたのはついこのひと月じゃないか。ところで、どうしておれはいま歩いている？　ほんとうにおれにあれができるのか？　いったいあれは本気なのか？　なかに、本気なわけがあるもんか。そうさ、空想で、自分で自分を慰めているだけさ、おもちゃだな！　そうさ、どうやら、おもちゃってところが正解らしいぞ！》

通りはひどい暑さで、しかも息づまるような熱気と雑踏、あたり一面の漆喰、建築の足場、れんが、土ぼこり、そして、別荘を借りる余裕のないペテルブルグっ子なら誰もが知る、あの、夏特有の悪臭——これらすべてがたちまち、そうでなくても調子の狂った青年の神経を、不快にかき乱した。ペテルブルグのこの界限に特に多い居酒屋から流れてくるたまらない悪臭と、平日にもかかわらずひっきりなしにいくわす酔っぱらいたちが、胸くそ悪くなるような陰惨な町の光景に、最後の色どりを添えていた。途方もなく深い嫌悪感が、一瞬、青年の端正な顔立ちをかすめた。ついでに言っておくと、青年は、なかなかの美男子だった。黒く美しい目、栗色の髪、背丈は平均よりも少し高く、やせぎすですらりとしていた。けれども彼は、やがて深いもの思いに沈んでしまった。より正確には、何やら夢うつつの状態におちいったらしく、周囲のことなど何ひとつ気にとめず、というより気にとめたくないと念じながら歩きだした。ときおり彼は、つい今自分でも認めた独白癖から、ぶつぶつひとりごとを重ねることもあった。そしてこの瞬間、自分の考えがときおり混乱してしまうことや、体がかなり衰弱していることも自覚していた。これでもう二日、ほとんど何も口にしていなかったのだ。

彼の身なりはあまりにひどいもので、ほかの、たとえそういうのに慣れっこになった人間でさえ、こんなぼろ服

をまとして真つ昼間に外出するなど、とても恥ずかしくてできなかっただろう。もっともこの界限は、身なりで人をおどろかすといったことがまずはずかしい、そんなふうな地区だった。センナヤ広場の近くにあつて、いろいろと怪しげな遊び場も多いし、それに、ペテルブルグの中心街になるこのあたりの表通りや裏通りには、とりわけ工員や職人が密集し、あれこれ風変わりな連中が町全体の風景を色どっていたので、そんな他人と顔を合わせるたびにいちいちおどろいたりすれば、それこそおかしいことになりかねなかった。

それに、青年の心は、敵意にも似た輕蔑の念が溜まりに溜まり、もともとがごくデリケートで、時には初々しいほど敏感ながら、今はこうしてぼろぼろの服で外出することすら、少しも恥ずかしいとは感じなかった。もっとも、日ごろから会いたくないと思つてゐる知人やかつての学友に出くわすともなれば、それはまた別の話だった……と、そのとき、こんな昼どきにどこに何しにお出ましになるのか、ばかでかい駄馬をつないだ大きな荷馬車に乗つたひとりの酔っぱらいが、通りしな、いきなり彼をどやしつけた。「おい、そのドイツ・シャッポ！」そして、手で彼をさし示しながら、声をかぎりにどなりはじめた。青年はぎくりとして立ち止まり、帽子を慌ててひつつかんだ。帽子は、丈の高いツィンメルマン製の丸帽だったが、もうすっかり古びて色あせ、穴とシミだらけでつばもとれ、おまけに角の部分がおそろしくぶざまにひしゃげて、横に飛びだしていた。それでも、彼をとらえたのは、恥ずかしさというより、むしろ驚きに似たまるきりべつの感情だった。

《やっぱりそうだろ！》どきまぎしながら、彼はつぶやいた。《思つていたとおりだ！ こいつがいちばんあぶないんだよ！ それ見ろ、こつういうくらんこと、こつういう些細なことから、計画がすべておじゃんになるんだ！ それにしても、目立ちすぎる帽子だ……こつけいだから、よけい人目についてしまう……おれのこのぼろ服に合わせるのは、ぜったいに学生帽でなきゃだめだ、たとえしなびた煎餅みたいなやつでもいい。こんな化けものじみた帽子じゃなくて。こんなもの、今どきだれもかぶつてないから、一キロ先からだつてすぐ目につくし、覚えられちゃう……要するに、後々まで覚えられてしまったら、それだけで立派な証拠にもなるってことだ。なるべく人目を引かないようにしなきゃ……些細なこと、些細なことこそ大事なんだ！……この些細なことってのが、いつもすべて

をぶちこわしにしちまうんだから……」

距離はいくらもなかった。家の門から何歩かということも知っていた。ちょうど七百三十歩だった。この空想にすっかりふけり出したところ、彼はいちど数えてみたことがあったのだ。そのころはまだ、自分でもその空想を信じられず、醜悪ながらもその魅惑的な大胆さに、いらだちを募らせていただけだった。ところがひと月たった今、彼はもうべつのちがった目で見はじめており、例の独白癖で自分の無力さや優柔不断をからかいつつけながらも、あの《醜悪な》空想を、なにかいやおうない、既定の事業と考えることに慣れてしまっていた。しかしそのじつ、自分でもまだ信じることができないでいたのだ。今も彼は自分の事業のリハーサルのために歩いており、一歩ごとにいいよ興奮が高まっていた。

心臓をどきどきさせ、体を小刻みにふるわせながら、一方の壁面が運河に面し、もう一方が\*\*\*通りに面した、とてつもなく大きな建物へと向かっていった。この建物は、全体が細かい部屋に区切られていて、仕立て屋から金物工といったあらゆる職種の職人や、料理女、いろんなドイツ人、春をひさぐ女たち、小役人その他が入居していた。建物の二つの門と、二つの中庭は、ひっきりなしに人の出入りがあった。そこには、三、四人の庭番が勤めていた。青年は、そのうちのだれとも顔を合わさずにすんだことにいたく満足しながら、目立たないよう門からすっと右に折れて階段に向かった。階段は、暗くて狭いわゆる《裏階段》だったが、こうしたこともすべて知りつくしていたし、きちんと頭にも入っており、むしろそうした状況がすべて気に入っていた。これぐらい暗ければ、好奇の目も怖れるには足りなかった。《いまからこんなにびくついていっているようでは、いざ、あれを決行するとなった段には、いったいどうなることやら?……》四階につづく階段を昇りながら、彼は思わず考え込んだ。

と、そこで、部屋から家具を運び出していた兵隊あがりの運送屋に、行く手をふさがれた。その部屋にドイツ人の役人一家が住んでいることは、前々から知っていた。《てことは、ここドイツ人は引っ越すわけだ。つまり四階のこの会談とこの踊り場は、これからしばらくあのばあさんの専用ってことになる。こいつは悪くないぞ……万が一ってこともあるし……》彼はまたこう考え、老女の部屋の呼び鈴のひもを引いた。呼び鈴は、銅ではなくブリキ

できていたかのように、ガランと力なく鳴った。こういう建物のこういう部屋には、たいてい、こんなふうな呼び鈴がついている。彼はその呼び鈴の音を忘れてしまっていたが、今この独特の音がふと何かを思い出させ、まざまざとそれを目に浮かべたかのようにだった……。そこで、思わずぐりとなった。前とはちがって、このときばかりはもうあまりにも神経が衰弱してしまっていたのだ。

しばらくして、ドアがほんのわずかにあいた。部屋の女主人は、いかにもうさん臭そうに、すき間から来客をじろりと見まわした。こちらからは、暗がりにも光る二つの目だけが見えた。しかし、踊り場にいくつか人影があるのを見て心強く思ったか、やがてすっかりドアを開けはなった。青年は敷居をまたぎ、衝立で仕切られた暗い玄関口に入った。衝立の後ろには、ちっぽけな台所があった。老婆は、だまりこくったまま青年の前に突っ立ち、不審そうに相手を眺めていた。やせた、小柄な老女だった。年のころ六十前後、悪意のこもるすごい目つきをし、鼻はちいさくとり、頭には何もかぶっていないかった。白髪のままの薄色の髪には、油がたっぷり塗ってあった。にわりの脚のように細長い首には、フランネルのぼろ布のようなものが巻いてあって、この暑さだというのに、肩に擦り切れて黄色く色あせた毛皮の胴着を羽織っていた。老女はひっきりなしに咳き込み、のどを鳴らしていた。おそらく自分を見つめる青年のまなざしに、なにか一種特別のものがあつたのだろう、老女の目にも、さっきの不審のいろがふいにちらりと浮かび上がった。

「ラスコーリニコフですよ、学生の。一カ月前にもうかがったんですがね」もつと愛想よくしなければと思いかえし、青年は軽く会釈をするとあわててつぶやいた。

「覚えてますよ、以前にいらしたのはよく覚えてます」不審そうな目をあいかわらず相手の顔から離さず、老女ははっきりと言いはなった。

「それですよ……また用件があつて来たんですよ……」老女の疑り深さに驚きながら、ラスコーリニコフはいくぶんどぎまぎしてつぶけた。

《だが、もしかするとこの女はいつもこうで、あのときはそれに気づかなかっただけかもしれない》不快な感情

にかられながら、彼はそう思った。

老女は何か思案するふうにしばらく黙っていたが、やがて脇に身を引くと、部屋のドアを指さし、客を先に通しながら言った。

「お入りなさいな、おにいさん」

青年が通された小さな部屋は、黄ばんだ壁紙が張られ、窓にはゼラニウムの鉢植えが置いてあり、モスリンのカーテンが掛かっていたが、ちょうどこのとき、夕日に明るく照らしだされていた。《てことは、きっとあの時も、太陽がこんなふうに照らしだすんだな……》ラスコーリニコフの脳裏にはからずもこんな考えが浮かび、できる限り家具の配置を覚えておこうと、室内にあるすべてのものに素早く視線を走らせた。だが、室内にこれといって目ぼしいものはなかった。家具はどれも古い黄木製のもので、大きくそり返った背もたれのあるソファ、その前に置いてある楕円形のテーブル、窓と窓の間には鏡のついた化粧台、壁ぎわには数脚の椅子、それに、小鳥をてのひらに乗せたドイツ娘を描く黄色い額入りの安物の絵が二、三枚――それだけだった。

部屋の隅にある小さな聖像の前に灯明が灯っていた。すべてがいたって清潔で、家具も床もつや出しがかけられていた。何もかもがびかびかに光っていた。《リザヴェータがやってるんだ》青年はふと思った。部屋じゅうどこを見まわしても、ちりひとつ落ちていなかった。《こうつくばりの年寄り後家さんの家にかぎって、だいたいがこんなふうにきれいなんだ》ラスコーリニコフは心のうちでそうつぶやきながら、奥の、ごく小さな部屋に通じるドアの前にかかった更紗のカーテンを横目で見やった。そこには老女のベッドと箆笥が置いてあったが、まだいちどもそちらをのぞいたことはなかった。老女の住まいは、この二部屋ですべてだった。

「何のご用です？」部屋に入ると老女は、相手の顔をじかに見ようと、さっきと同じように彼の真前に突っ立ったまま、きびしい口調でたずねた。

「質草を持ってきたんですよ、ほら、これです！」そう言うとき彼は、平たくて古い銀時計をポケットから取り出した。時計の裏蓋には地球儀が描いてあった。鎖は鋼鉄でできていた。

「そう、前回質入れなされた品ですがね、あれももう期限ですよ。一昨日でひと月立ちましたがね」

「利子をもうひと月分、お支払いします、もう少し辛抱願います」

「言っときますがね、お客さん、辛抱するか、すぐに流しちゃうか、そりゃあたしの勝手ですがね」

「この時計はいい値がつくでしょう、アリョーナさん？」

「ろくでもない品ばかり持ってきて、お客さん、だめですよ、ろくな値打ちもありやしません。前回の指輪には二ルーブルおつけしときましたがね、あれだって、宝石屋に行きや、新品が一ルーブル五十コペイカそこで買えるんだから」

「四ルーブルぐらいつけてもらえませんか、親父の形見ですから、かならず請けだします。もうすぐお金が入ることになっていきますし」

「利子天引きで、一ルーブル五十コペイカでどうかね？」

「一ルーブル五十コペイカだって！」青年は思わず声を上げた。

「いやならいやで結構ですがね」そういつて老女は、時計を相手に突き返した。青年はそれを手に取り、腹立たしさのあまり直ちにその場を立ち去ろうとしたが、すぐ思いとどまった。ほかに行くあてもなかったし、それに自分にはまた別の用件もあったことを思い出したのだ。

「それで結構です！」乱暴にそう言いはなった。

老女はポケットに手を入れて鍵束を探ると、カーテンの奥の部屋に入ってしまった。一人部屋の真ん中に残された青年は、好奇心にかられて聞き耳を立て、あれこれ考えをめぐらせた。筆筒の鍵を開ける音が聞こえた。《きつといちばん上の引き出しだな》と考えた。《鍵束は、つまり、右のポケットに入れてるってわけだ……鉄の輪でひと束にしてな……そのうち、鍵齒のつたいいちばん大きな、ほかより三倍くらい大きいのがひとつあったが、あれはむろん、筆筒のじゃない……ってことは、ほかにもまだ手箱かトランクがあるってことだ……こいつはおもしろいぞ。トランクにはたいてい、ああいった鍵が……ああ、それにしても、すべてがなんてあさましい……》



老女が戻ってきた。

「ほら、お客さん、一ルーブルにつき月十コペイカを利子にして、一ルーブル半だから、先払いで十五コペイカを天引きさせてもらいますよ。それに前回の二ルーブルは今のところ二十コペイカ。つまり合計で三十五コペイカ。てわけで、お客さんの時計の受け取り分は、しめて一ルーブル十五コペイカ。さあ、受けとんなさいな！」

「えっ、合計で一ルーブル十五コペイカ！」

「ええ、その通りですよ」

言い争うのをやめ、青年はおとなしく金を受け取った。老女を見つめたまま、彼は帰りを急ごうとしなかった。なんかまだ言いたらないことが、したりないことがあるような気がしたが、自分でもそれがいったい何なのかわからない様子だった…。

「アリョーナさん、もしかしたら、数日中にまた質草を持ってきます…銀製の…なかなかいいタバコ入れでしょね…友人から返してもらえたらすぐ…」彼はどきまぎし、そのままだまり込んだ。

「それはまた、そのとき話しましょうよ、お客さん」

「じゃあ、これで…そうそう、おばあさんはいつもお宅に、おひとりでおられるんですね、妹さんはいらっしゃらなくて？」玄関に向かいながら、できるだけだけた調子でたずねた。

「お客さん、妹にどんな用があたりで？」

「とくに何もありませんがね。ただ聞いてみただけです。それをすぐに…じゃあ、また、アリョーナさん！」ラスコーリニコフは、完全に狼狽しきって部屋を出た。狼狽は、いよいよはげしさを増していった。階段を下りる途中、何かにはっと怯えたかのように、何度も足を止めたほどだった。そして通りに出たところで、とうとう声をあげた。

「ああ！ 何もかもむかつく！ ほんとうに、ほんとうに、おれは…いや、あんなものはナンセンスだ、たわごとだ！」彼は決然と言い放った。「ほんとうに、どうしてあんな怖ろしい考えが頭に浮かんだんだ？ それにしても、

おれの心は、なんてきたないことを受け入れることができるんだ！　なにより、きたないこと、汚らわしいこと、下劣なこと、そう、下劣なことだ！……おれは、まるひと月……」

しかし、言葉によっても叫びによっても、心の高ぶりを言いあらわすことはできなかった。老女の家に向かう途中から、自分を押しつぶし、苦しめはじめた果てしもない嫌悪感が、今や怖ろしいほどの大きさに達し、あまりにもくっきりと正体を明らかにしたため、自分でももう、その苦しさからどう逃げ隠れてよいものか、わからなくなっていたのだ。まるで酔っぱらったように、行きかう人々にも気がつかず、人にぶつかりながら歩道を歩いていた。そして、次の通りに入ってようやく正気にもどった。

あたりを見まわし、自分が居酒屋のすぐそばに立っていることに気づいた。居酒屋の入り口は、歩道から階段を下りた地下にあった。そのときちょうど、ドアからふたりの酔っぱらいが出てきて、たがいにもたれあい、罵りあいながら通りに上がってきた。ラスコーリニコフは、長く考えることなく、すぐに階段を降りて行った。これまで、こうしたぐいの居酒屋にいちども足を踏み入れたことがなかったが、いまはくるくる眩暈がしていたし、おまけに焼けるような喉の渇きに苦しめられていた。冷えたビールをぐいとひと飲みしたかったし、しかも急に襲ってきた体力の低下を彼は空腹のせいとも考えていたのだった。

暗く、汚らしい居酒屋の隅に腰を下ろし、べとべとするテーブルに向かった彼は、ビールを注文し、最初の一杯をむさぼるように飲み干した。するとたちまち気分が楽になり、頭の中もはっきりしてきた。《何もかもくだらない》彼は、心に光を感じながらそう口にした。《どぎまぎする理由がどこにあったんだ！　体調が悪かっただけのことだ！　ビールをグラスで一杯と、乾パンのひとかけらで――ほらこのとおり、頭はたちまちしっかりし、考えもはっきりする、計画もしゃきつとしてくる！　べつ、何もかもくだらんことばかり！……》だが、こうして蔑むように唾を吐いてはみたが、何か怖ろしい重荷から急に解きはなれたかのようにすっかり明るい顔になり、まわりに居合わせる人々に愛想よく目を走らせはじめた。しかしこの瞬間さえ、彼はこの、何ごともよくとらうとする感覚そのものもまた病的なのだと、ぼんやり予感していた。

このとき、居酒屋にはごくわずかな客がいるだけだった。階段で出くわしたふたりの酔っぱらいのあとから、女連れの五人ばかりの男の団が、アコーディオンを抱えてどやどやと出て行った。彼らがいなくなると、店内は急に静かになり、広々とした感じになった。残っていたのは、ビールと向かい合って腰をかけている、ちょっと見た目には町人風の、軽く酔いがまわった感じの男と、その連れでシベリア帽をかぶり、白髪まじりのあごひげを生やしている、でっぷり太った大柄な男だった。こちらはひどく酔っていて、椅子の上でうとうとしていたが、ときおり寝ぼけたようにとっぜん両手を大きく広げて指を鳴らし、椅子から腰を上げずに上半身でひょいと跳びあがるまねをしたりした。そして、必死になって歌詞を思い出そうとしながら、何かばかきい歌を口ずさむのだった。

まる一年、によーぼーをかわいがったまある一年、によーぼーを、かーわいがった……かとおもうと、いきなり目をさまして、またもや――

ポジャチェスカヤ通りを歩きだしたら、昔のによーぼー、見つけた……

だが、その男のおめでたい気分をとくにわかってやろうという相手は、だれひとり現れなかった。むつり屋の彼の連れは、相手の突発的なしぐさを、むしろいまいましてに、うさん臭そうな目で眺めやっていた。居酒屋にはほかに、見たところ役人あがりといった風采の男がもうひとりいた。彼はウォッカの子びんを前に、ひとりぼつねんと腰かけ、ときたま一口また一口とやっては、ぐるりとあたりを見まわしていた。彼もまた、いくぶん興奮ぎみの様子だった。

ラスコーリニコフは、もともと人ごみが苦手で、先に述べたように、とくに近ごろはどんな人づきあいも避けてきた。ところがいま、彼はなぜかにわかに人々に惹きつけられた。彼のなかで何か新しいものが立ちおこり、それと同時に、人恋しさにも似た飢えを感じたのだ。彼は、まるひと月におよぶ凝縮された悩みと、陰うつな興奮のせいで疲れはてていたのだ、たといいつきでも、たとえどんな場所でもいい、いつもとは別の世界で息がしたかった。だから彼は、あたりの薄汚さにもめげず、いまは満足すら覚えながらこの居酒屋に腰をすえたのだった。

店の主人は別室にいたが、どこからか階段を降りてきては、しょっちゅう店内に顔を出していた。そのたびにま

ず現れるのが、大きな赤い折り返しのある、靴クリームを塗った粹なブーツだった。主人は、半外套をうえから羽織り、ノーネクタイで、黒い繻子のひどく脂ぎったチョッキを着こんでいたが、顔全体がまるで、オイルを塗りたくった鉄の錠前みたいな感じだった。カウンターの向こうには、十四歳ぐらいのボーイと、それよりさらに年下のボーイがもう一人いて、注文があるたびに品物を出していた。小ぶりのキュウリ、黒パン、魚の薄い切り身が並べてあり、ひどくいやな臭いを放っていた。腰を下ろしているのも耐えがたいほどむし暑いうえ、すべてに酒の臭いがしみこんでいるので、空気を吸っているだけで、ものの五分もたてば酔いがまわってきそうだった。

まるで一面識もない相手ながら、ひと目みるなり、ひとことも言葉をかわさないうちから、なぜか急に興味をそえられるような人との出会いが、ときとしてある。ラスコーリニコフから少し離れてすわっている、退職役人風の客から受けた印象というのが、まさにそんなふうなものだった。青年は、あとになんだかこのときの最初の印象を思い起こしては、あれこそ虫の知らせだったと思った。彼は、ちらりちらりと絶えずその役人に目をやったが、それは、その役人がしきりにこちらを見つめ、声をかけたくてうずうずしているらしいせいもあった。役人は、店の主人もふくめ、居酒屋にいる残りの連中になぜだか慣れっこになっていて、いかにも退屈そうに、と同時に、身分も教養も低すぎてとても話し相手にならないとでも言わんばかりの、何やら偉ぶった、見くだすような目で彼らを眺めていた。すでに五十を越えようかという、中背ながらがっしりした体つきの男で、白髪まじりの頭にはおおきなはげがあり、アルコール漬けのせいでむくみのきた、黄ばんだ、いやむしろ青みがかった顔をし、腫れぼったい瞼の奥からは、何か裂け目のように小さい、それでいて燃えたつような、赤みをおびた目が輝いていた。しかし、男にはどこことなく、じつに奇妙なところがあった。そのまなざしには、何か感激性といったものさえ輝いているのだが――おそらく分別も知恵もあるにはあるのだろう――と同時に、そこに何やら狂気のような感じが煌めいているのだ。男は、ボタンもとれた、古い、すっかりぼろぼろになった黒の燕尾服を着ていた。ひとつだけかるうじてついているボタンを、どうやら礼儀を失するまいと願うらしく、律儀にかけていた。ひとつだけかるうじてついているボタンを、どうやら礼儀を失するまいと願うらしく、律儀にかけていた。南京木綿でできたチョッキの下からは、しわくちゃになった、しみだらけの汚らしい胸当てがはみ出ていた。顔は役人風に剃ってあったが、それもだいぶ経って

いるようで、青みがかった、ごわごわしたひげがびっしり伸びかけていた。それに彼のしぐさには、事実、いかにも役人らしくものしい趣があった。そのくせそわそわと落ち着きがなく、髪の毛をかきむしったり、こぼれた酒でべとついたテーブルに穴の開いた両肘について、いかにも所在なげに両手で頭を抱えこんだりしていた。やがて彼は、ラスコーリニコフのほうをまともに見すえ、大きなしっかりした声で話しかけてきた。

「失礼ですが、そこのお方、ひとつまじめなお話をさせてはもらえませんか？　といいますのも、見栄えこそばつとしておられませんが、そこは年の功、あなたには学もあり、酒もあまり飲み慣れていないお方ってことがすぐに分かるんでして。わたし自身、誠意とひとつにむすびあった教養といったものを日ごろから重んじておりまして、そればかりか、九等官の末席を汚しておる身でしてね。マルメラードフ、そういう苗字で、九等官をしております。で、失礼ですが、お勤めでいらして？」

「い、いえ、学生です……」青年は、相手のもってまわったような口ぶりや、あまりにもストレートに話しかけられたことにもいくぶん面くらって、答えを返した。ついさっき、どんな相手でもいい、人と話をしてみたいと一瞬願ったのが嘘のように、いざ、こうして声をかけられてみると、自分の一身にふれる、あるいは少しでも触れようとすると他人への、いつもながらの不快で、いらだたしいほどの嫌悪感にかられるのだった。

「てことは、学生さん、それとも元学生さんってわけですか！」役人は叫んだ。「思ったとおり！　年の功ってやつですよ、おにいさん、これが年の功ってもんなんですよ！」そう言うとき彼は、いかにも得意げに指を一本、額に押し当てた。「学生さんだったわけね、でなくとも、学問の道を歩いてこられた！　では、失礼ながら一つ……」そう言うとき彼は立ちあがり、そのはずみでぐらりとよろけたが、ウォッカのびんとコップをつかんで、青年の斜向かいの席に腰を下ろした。酔ってはいたが、話しぶりは勢いがあって、雄弁だった。ところどころいくらか言葉にまつまて、「えー」をくりかえした。まるひと月、だれとも話をしてこなかったかのように、何かしら貪るような調子でラスコーリニコフにからんできた。

「で、よいですか」彼はほとんどもったいぶった調子で切り出した。「貧乏は悪徳ならず、こいつは真理ですな。」

わかつとりますとも。酒が徳ならずってことぐらい、まして、ね。でも、これが極貧となったらです、極貧となったら、こいつはもう悪徳なんですよ。たんに貧乏なだけなら、生まれながらの上品な気持ちを保っておられますが、これが極貧となったら、だれだってそうはいきませんよ。つまり、極貧ってことになったら、こいつはもう棒っきれで追っばらわれるところじゃない、もっと恥ずかしい思いをさせてやろうってんで、箒で掃かれ、人間のお仲間からばい捨てられちまう。しかも、それが当然なんです。なぜって、極貧ってことになれば、自分でまっさきに自分を辱めにかかりますからなあ。で、行きつく先は酒場通いってことになるわけです！ で、よいですかね、今からひと月前です、うちの家内がレベジャートニコフ氏にこっぴどく殴られましてね。ですが、うちの家内はわたしなんぞとはちよいと出来が違う！ おわかりですか？ それともうひとつ、ほんの好奇心ってことで質問させていただきますがね、あなた、ネヴァ川の干草船ってところで、ひと晩明かしたことがございますか？」

「いや、ありませんよ」とラスコーリニコフは答えた。「それって、いったいなんの話なんです？」「いえね、わたしはそこから通つとるんですよ、もう五泊目になりますか……」

彼はコップに酒を注ぎ、一気にそれをあおると、考えこんだ。たしかに、彼の上着といわず髪の毛にまで、干草がちらほら貼りついているのが見えた。彼がもう五日間、着替えをせず、ろくに顔も洗っていないことは歴然としていた。とくに手がひどい汚れようで、脂ぎり、赤みをおび、爪は真っ黒だった。

どうやら彼の話は、酒場にいる客たちのけだるい興味を呼びさましたらしかった。カウンターの向こうにいるボーイたちは、くすくすしのび笑いを漏らし始めた。店の主人は、この「おもしろい男」の話を聞こうとわざわざ上の階から降りてきたらしく、いかにもかったるそうに、そのくせもったいぶってあくびなど漏らしながら、少し離れたところに腰を掛けた。マルメラードフは、あきらかにここの常連らしかった。かれのものものしい話しぶりは、見知らぬいろんな客を相手に、頻繁にくだを巻いているうちに身についたらしかった。こういう習慣は、ある種の酒飲みにあつては、根っからの欲求と化しているものなのだ。家できびしく扱われたり、こき使われている連中の場合がとくにそうである。だからこそ、彼らは、せめて酔っぱらい仲間には何とか自分の言い分を聞いてもらい、で

きれば尊敬までも勝ち取ろうとつねにやっきになるのだ。

「おい、そこのお調子もん」店の主人が大声で叫んだ。「役人のくせして、なんだって働かない、なんだって勤めに出ない？」

「わたしはどうして働かないかって、だんな？」マルメラードフは、まるでラスコーリニコフから水を向けられたとでもいうように、もっぱらそちらに顔を向けながら、話を引きとった。「どうして勤めに出ないか？　じゃ、こんなむだな暮らししてて、わたしの心が痛まないとお思いですか？　ひと月前、レベジャートニコフ氏がうちの家内を殴りつけたときも、わたしは酔っぱらって寝ていましたがね、それでわたしが苦しまなかったとでも？　失礼ながら、学生さん……、たとえば……そう……絶望的借金つてのを、しようとなすったことがおありですか？」

「ありますよ……でも、どう絶望的なんです？」

「つまり、まるきり絶望的なんです。借金を申し込んだからってどうにもならないのが初めからわかっている。たとえば、そう、この男、このたいそう高潔ですこぶる有益な市民がです、まかりまちがっても金など貸してくれないとわかっている。だって、そうでしょうが。こっちこそ聞きたいくらいです。どうして貸してくれるのか、ね？　なにしろ相手は、こっちが金を返さないことくらい百も承知なんです。同情から？　でも、新思想を追っかけているレベジャートニコフ氏が、ついこの間も説明してくれました。現代じゃ、同情なんてもんは学問上も禁じられてる、経済学とかいうのが発展しているイギリスじゃ、現にそういうふうになってる、って。どうして金を貸してくれるのか、こっちこそ聞きたい。ところがです、貸してくれるはずがないと初めからわかってるくせに、それでも、のこのこ出かけていく、で……」

「じゃ、どうして出かけていくんです？」ラスコーリニコフは口をはさんだ。

「でも、もし行く相手がなかったら、これ以上、行き先がなかったら、どうなるか！　人間だれしも、どこかに行き先がなくっちゃ、どうしようもない。何せ、どこでもいい、どこかに行かなくちゃならないときってのがあるもんなんですから！　うちの一人娘がはじめて黄の鑑札のお世話で仕事に出ていったときは、さすがのわたしも出かけて

いきましたよ……(何せうちの娘はこの鑑札で暮らしてるんでございまして……)」と彼は、いくらか不安げな面持ちで青年を見やりながら言い添えた。